

鷗友学園女子中学校

二〇一三年度

一次入学試験問題

【国語】

時間 50 分

【校長先生からのメッセージ】

いよいよ入試が始まります。今日までよくがんばってきましたね。
今までコツコツと勉強してきた自分を信じ、最後までがんばってください。
みなさんの持っている力が十分に発揮されることを願っています。
ゆっくと深呼吸をし、心を静め、開始時刻を待ちましょう。

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は14ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生をよんでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

つぎの日は日曜日で、理央は朝から父とモコをさがしに出かけた。父が細いアンテナを持ち、理央が小型ラジオのような受信機を持った。モコにつけた発信器からはつねにシグナルが出ている。シグナルはアンテナで探し、それが受信機に方向や距離として表示される。条件さえよければ、最大距離で四十キロ以上のシグナルが受信できる。

しばらく歩いてみたが、受信機はなかなか鳴らなかった。
「どうもうまくひろえんなあ」

父はアンテナの角度を工夫するが、なかなかシグナルをひろえないらしい。前に郊外の運動公園でテストをしたときは、理央が腕に乗せたモコの発信を、車で高速道路を五十キロは移動した父の受信機がひろったが、住宅地ではうまくいかないらしい。障害物が多いせいだろうか。

それに通行人の視線も気になる。見えない器具を持ったふたり連れが、上ばかりを見て歩いているのは目立つようで、行きかう人にじろじろ見られる。

結局、受信はあきらめ、理央は原始的な方法でたずね歩くことにした。

「鳥が逃げたんですけど、鈴の音をききませんでしたか」

モコが近くではばたけば、音がするはずだ。すれちがう人にきいてみたが、はかばかしい情報は得られなかった。

家の屋根、電柱、電線……

くまなくさがしてみる。猛禽類は草の茂みなど、羽根が傷むようなところには行かないはずだ。さがすのはそれほど難しくないだろうとたかをくくっていた理央は、しだいに心配になってきた。

車に乗って、位置を変えながら広い範囲でさがしてみることにする。郊外の公園にも行ってみた。鳥が上空を何羽か飛んでいたけれど、受信機はなんの反応も示さなかった。第一、見れば、タカではないことはすぐにわかった。

マンションの駐車場に帰ったときはすでにお昼を過ぎていた。

「どうしよう」

① 理央はすっかり途方にくれた。

今ごろ、モコはどうしているんだろう。おなかをすかせているだろうな。知らないところで心細いだろうな。カラスに攻撃されていないだろうか。まさか、自動車にぶつかっていないだろうか。海は渡らないまでも、よくない想像はいくらでもできた。

わたしが、ひもさえきちんと結んでいたら。

「家でちよっと待ってみよう」

父の言葉にうなずきかけたとき、理央の頭に、ある可能性がひらりと浮かんだ。

「康太のどこ！」

もしかしたら、龍安寺に行っているのかもしれない。

「ああ、そうだな。あそこがあつたな」

父も声をあげた。

「ちよっと行ってみる」

理央は走りだした。どうして今まで気がつかなかったのだろう。まずは龍安寺に行ってみるべきだった。あそこはモコの第二の家なのに。

商店街をぬけ、通りを走る。坂をのぼり、石段を一気にのぼる。全身の体力のかぎりに走る。息がきれる。境内をかけぬけ、裏庭に回る。背後でスウが激しくほえた。コンクリートの小屋をのぞきこんだ。

空っぽ。

② 理央はその場にしゃがみこんだ。冬も近いというのに、全身からいやな汗がふきだす。

「あれ、理央ちゃん、どげんしたとね」

後ろから康太のお母さんの声がした。

理央はしゃがみこんだまま振り返った。

「モコが、モコが。いなくなっちゃいました」

康太の家の居間で、おばさんが温かいココアをいれてくれた。ひと口飲む。牛乳のやわらかさとチョコレートチョコレートの香りが口の中に広がる。少しばかり強い甘さが、じんわりと体にしみこんだ。

「スウがあんまりほえたけん、出てきてみたよ。理央ちゃん、少しは落ちついたね？」

理央はうなだれたまま、こくんとうなずいた。

三口飲んだところで、理央はモコがいなくなった顛末てんまつを話した。

「そうね。それは心配やねえ。モコちゃんも自分で飛べるようになったとだもん。行ってみたかところがあるかもしれんねえ」

おばさんはゆつくりとした調子で言った。

壁の時計が秒針を刻んでいる。理央はあたりを見回した。

「あの、康太は？」

そうきくと、おばさんはなぜかふと顔をくもらせた。そして、そのくもりをかき消すように笑顔えがおを作った。

「お母さんに会いにいったと」

「お母さんに……」

それきり理央は言葉が続かなくなってしまった。

「本当のお母さんたい」

おばさんは、もう悲しい顔はしていなかった。世間話でもするように、軽く淡々たんたんと話しはじめる。

「康太の本当の親がほかにいることは、理央ちゃんも知つとるやろ」

「……はい」

「今年の春ごろやったかいな。本人から直接、電話がかかってきたとよ。『一目でよかけん会いたい』って。たまがったよー」

「びつくりしますよね」

理央は混乱した頭でとりあえずうなずいた。

「でも、そのことは、康太にはずつと言わなかったと。言えんやったとよ。やっぱ、こわかったとやろうね。本当のお母さんに会ってしまったら、あの子はあつちに帰りたいなくなるんやないかと思うたと」

きいたとたん、理央は首を振った。

「それはないよ、おばさん。康太はおばさんや住職のことが大好きやもん」

理央はきっぱりと言った。それは確信を持って言える。康太は親思いだ。住職やおばさんに、深い愛と心からの尊敬いだいを抱いているのは、はたで見えていてもよくわかる。

「ありがとね。でもね、やっぱわたしは少し心配やったとよ。やけど、住職が『康太はだいじょうぶやけん、本人に考えさせよう』って言いんしやったと」

おばさんは自分を納得なごさせるみたいに深くうなずいた。

「康太の大事なことやけん、自分で考えさせんとね。それで自分が出した答えがいちばんよかことつたい。もう康太にはそれだけの力がある。わたしがそれを邪魔じゃましたらいかん。本人に考えさせるのも、親の役目やろうと思いなおしたと。それで伝えたとよ。夏休みになったころやったかいな」

理央は康太の様子がおかしかったことに思い当たった。これまでにままして熱心しんぎように修行しゆぎやうしたかと思えば、意地悪なことを言っで、からんできたり、落ちこんでいるような姿を学校で見たこともあった。

「そういえば……」

「悩なやんどったと思うよ」

理央がうなずくと、おばさんもうなずいた。そしてゆつくりと話しはじめた。

「わたしは子どもが大好きやったと。でもなかなか子どもがさずからんでねえ。そしたらあるときね、檀家だんかさんのおばあさんで、ちよつと不思議なことを言う人があるつちやけど、その人が言いんしやったつたい」

「なにをですか？」

「あなたがたの子どもは、もう生まれとらっしゃるかもしれんねて」

「え？」

「うん。わたしもそのときはなんのことかわからなかったし、それ以上深く考えんかったと。でもそれからしばらくたって、隣町となりまちの養護施設しせつにご縁えんができてね。養護施設や子ども病院で絵本の読みかせをしとるグループに、古いお友達がおったつたい。ひとり抜ぬけていそがしいけん、わたしに手伝ってもらえんやろうかって言ってきたと。すぐ引き受けた」

それからおばさんは、いとおいしい思い出の箱を目の前で広げてみせるように笑った。

「そこで康太に会ったたい。かわいかったとよ。丸顔で、目がきらきらしてね」

「うん、わかる」

理央はうなずいた。今、思い返してみると、幼稚園のころの康太も、ぱっと目立つ顔立ちをしていたと思う。

そして、今の康太もどちらかといえば、かわいらしいタイプのイケメンだ。性格もくつたぐがないので、案外、女子から人気がある。

「康太は、絵本やらお話やらも好きやったとやろうね。わたしたちが来ると、いちばん前に座って一生懸命きいとったよ。まだ三歳になったばかりやったね。もう本当にかわいくて、かわいくて。そんなときふっと、思い出したんよ」

おばさんは一呼吸置いて続けた。

「もしかしたら、この子やないやろうかて」

「あのおばあさんが言った？」

「そうそう。この子がおばあさんが言うのとられた、うちの子やないかって。まあ、^③勝手な解釈やけどね」

「……………」

「でも、康太のほうもわたしになついてくれてねえ。相性というんやろうね。なんか、会うたびに気持ちを通じ合うのがわかってね。それで、あるときわたし、きいたんよ。『康ちゃん、うちの子になるね？』って」

「そしたら、康太は？」

『なる』て。すぐ言うた」

おばさんは本当にうれしそうに声をはずませた。

養護施設から養子を受け入れるのは、けっこう条件が厳しいらしい。親になる人の年齢や職業や人などが細かく調査される。当然、本当の親の承諾も必要になる。おばさんは、養子縁組がそう都合よくいくものではないことを説明してくれた。

「でも、うちの場合は、いろんなことがびっくりするくらいスムーズにいつてね。住職にも言わんでふたりで決めたんやけど、住職もすんなり承諾してくれた。だって、康太はほんと、いい子たい。すかつと明るいでからさ。あれは、仏様があの子の心に

青空をくださったと思うとよ。どうしようもない悲しみと引きかえにくださったとよ」

おばさんは両手を合わせた。

康太を養護施設にあずけにきたのは、まだ二十歳そこそこの若い未婚の女の人だったらしい。ひとりで子どもを産んで二年間は育てたものの、体が弱くどうしようもなくなつて、養護施設にあずけたという。施設を通じておばさんたちが養子縁組を申し出たときも、『お願いします』と短い返事が来たそうだった。

「なのに、今さらどうして会いたいとか言うんやろ」

理央はつい声を強めた。ずつとほつておいたくせに、身勝手だと思った。

「ちよつとわるか病気になるしとて。それで、手放した康太に会いたくなつたとして」

「いくら病気になるしとて、今さら会いたいとか」

「向こうさんね、『こんなこと言える立場やないけど』て電話口で泣きよんしやつた。今は、郷里の武雄の病院におらすらしい」

「武雄？」

きき覚えのある地名に、理央は眉を寄せた。

「そうよ。やけん、康太が理央ちゃんたちといっしょに武雄に行くて言うたときは、ぎくつとしたよ。康太にはまだ言つてなかったけんね。本当はかくしとくつもりやったでしょうが。それに、康太は武雄で生まれたてきいとったからね。もしかしたら、向こうでなんか思い出すかもしれんて心配やつたとよ」

「それで……」

理央は思いあたる。夏の初めに武雄に出発するとき、おばさんは明らかに動揺していた。いつも大きくかまえているおばさんが、ひどくあわてていたようだったので、印象に残っている。

おばさんも、そのときのことを思い出すように続けた。

④「でもそれもわたしが覚悟する手伝いになつたと。康太が偶然、武雄に行くことになつたとも、仏様の思し召しやないかと思うたんよ。これはいかん。いくらかくしても、ぜったいばれる。それで住職がいうとおり、康太に話したとよ」

「康太はなんて？」

「なーんも。ただじつとだまったままやった。そして、両手を合わせてから、本堂の仏像をみがきはじめた」

夏休みの途中から、康太がやけに修行に力を入れはじめたのは、そういうことがあったからだろうか。それはおばさんにも思いあたることのようだった。

「康太なりに悩んどったとやろうね。それからいつそう寺の勤めをがんばりはじめてね。康太はもともとまじめやったけど、ちよつと見とつてつらいくらいがんばりだしたと。体こわさんやろうかてはらはらしとつたら、先週の水曜日やったかね。急に住職とわたしに話があるて言いだして」

「先週の水曜日……」

康太と小さな言い争いをした日だと、理央は思いおこした。

「自分を産んだ人に会ってみて言うた。もう決心ができたみたいやった。『会ってどんな気持ちになるかわかんけど、逃げとつたってしょうがない』てきっぱり言いんしゃった。それで、今日、住職といっしょにお見舞いに行ったと」

「そうだったんですか」

「でもねえ。送りだしてはみたものの、やつぱりいろいろ考えるもんやねえ。本当のお母さんに会うなんて、まだ康太には早かつたつちやなかるうか。まちがいやなかつちやろうかとかねえ」

康太の悩みや胸の内は、自分には到底わからない。ましてやおばさんの迷いなんか、なおさら。しばらくだまつてお茶を飲んでいたおばさんは、理央の手にふつと視線を落とした。

「その手袋は、遙ちゃんのじゃなかね？」

「あ、ああ。……そうです」

理央も自分の左手を見つめる。何度も洗って色あせているし、へたくそにつくろつてある手袋があった。

「遙ちゃんは、刺繍やらレースやらが好きだったもんね」

おばさんは思い出すように目を細めた。

その時だった。

リリリン。

「あつ」

理央ははじめたように立ちあがった。

鈴の音だ。

「モコ！」

スニーカーに足をつつこんで、理央は玄関を飛びだした。鈴の音がした方向に走っていく。

リリリン。

鈴はたしかに鳥小屋のほうからきこえてくる。

「モコ！」

茶色い羽根、黄色いくちばし、そして、黒い大きな瞳。

モコだった。

「おいで」

鳥小屋の屋根にいたモコについ理央は呼びかけた。モコは理央を認めると、一直線に飛んできた。

「いたつ」

グローブのない腕にするどい爪が食いこんだ。思わず手を振り払うと、モコはばたばたと止まり木に止まった。

「あら、モコちゃん帰ってこらしやつたねー」

物音をききつけて、おばさんがやってきた。

「はい！ 帰ってきました」

理央はさげぶように言った。モコはどこかはずかしそうに首をかしげている。

「おなかすいたやろう。はよ家に帰って、ごはんば食べさせてもらいなさい」

ちよつどそのとき、小屋から続く駐車場に車が入ってきた。

「あ、こつちも帰ってきた」

おばさんは明るい声をあげた。

車から康太がおりてくる。

「お帰り。おなかすいたでしょう」

おばさんはモコに言ったのと同じように言った。

「うん。腹減ったばい」

「朝からおでんを煮こんどったけん、いっぱい食べなさい」

「お、やうい！」

康太はいつもの康太だ。そんな康太の様子に安心したように、おばさんは住職と家に戻っていった。

「モコはこんな時間まで特訓されたとか？ きつつい母ちゃんやなあ」

康太はモコを見て、わざとらしく嫌味を言う。

「ちがうとよ。モコ、昨日から逃げとったんよ。それで今、帰ってきたと」

「へー、そりやそりや」

康太は、気が抜けるようなあいづちをうった。

「そんなかるがるしく言わんでよ。こっちは相当心配したとよ。大変やったっちゃけん」

理央は口をとがらせる。自分の胸の内も康太には絶対わからないと思い、なぜかそれがおかしくて、理央はひとりふきだした。

「なんか？」

「なんも。じゃあね」

理央は首を振って歩きはじめる。と、大きな声で康太に呼びとめられた。

「理央」

「なん？」

「うん。なんちゆうこともないけどさ」

康太は少し口ごもったあと、妙に改まった顔つきになった。

「このまえはありがとう」

「このまえ？」

「うん。⑤ 飛ぶときは、風に向かって飛べって教えてくれたやろ。おかげですつきりしたことがあったっちゃん」

康太はさばさばしたように言った。おばさんは心配していたけれど、本当のお母さんに会ってきたのは、まちがいでなかったようだ。

「へー、そりやそりや」

理央はわざとかるがるしく答えた。さっきのお返しだ。

「ふん。じゃあ、また明日の」

康太が鼻を鳴らして、家に走っていく。

「おでんー、おでんー」

うれしそうな声をききながら、理央はモコと石段をおりた。

（まはら三桃『鷹のように帆をあげて』）

問一 — 線部①「理央はすっかり途方にくれた」とありますが、これは理央のどのような様子を表していますか。「途方にくれた」理由もふくめて説明しなさい。

問二 — 線部②「理央はその場にしゃがみこんだ」とありますが、この時の理央の気持ちを、なぜそう思ったのかもふくめて説明しなさい。

問三 — 線部③「勝手な解釈」とありますが、おばさんは何をどのように考えたのですか。具体的に説明しなさい。

問四 — 線部④「でもそれもわたしが覚悟する手伝いになったと」とありますが、おばさんは康太に対してどのような思いをいだくようになったために覚悟することができたのですか。「覚悟」の内容をふくめて説明しなさい。

問五 — 線部⑤「飛ぶときはーあったっちゃん」とありますが、この時の康太の心情はどのようなものですか。康太にとって「風に向かって飛ぶ」とはどのようなことをふくめて、百字以内で説明しなさい。

二

次の文章は二〇一一年三月十一日の震災（3・11）をうけて書かれたものです。本文を読んで後の問いに答えなさい。

いま、東北地方は日本におけるコメの最大供給地になった。東北新幹線は、広大な田園風景のまん中を突っ走ってゆく。四角形に整地された田んぼ、田んぼ、田んぼ。その風景は、いつのまにか、「日本」の故郷と呼ばれるような風景になっていった。田んぼがいつぱいになって、みんなが白いおコメを食べられれば豊かだと感じられた時代があった。けれども、食べものがあふれる時代になるとともに、そのありがたみは薄れていった。ダイエットをするのに、炭水化物のおコメを避けるひともある。銀シャリが「贅沢なもの」だとあこがれる時代ではなくなった。ずいぶん前から、日本はコメ余りの時代を迎えている。

①そして、稲作農家が抱えている現実もじつはそうとうに、過酷だ。コメは日本人の主食と言われて久しいけれど、去年や今年のおコメの相場を知っているひとがどれだけいるだろうか。一九七〇年代から減反政策が布かれ、それ以降、米価は下落していく。コメの市場が自由化になったことで、一部の高級米は高値をつけているけれど、一般にスーパーなどで流通しているコメは、生産者が出荷する時には、一俵（六〇キロ）、一万四千円くらいだ。一枚の田んぼから仮に六〇〇キロ収穫できたとしても、十四万円。そこから種籾代や肥料、機械代金などを引くと、実収入は七万円くらいにしかない。田んぼ一枚を一年間耕して七万円。田んぼ一〇枚耕しても七〇万円。これでは、どんなに生活費をおさえたとしても、稲作だけで暮らしていくのはどう考えてもむずかしいことになる。兼業するとしても、そもそも労働のわりには儲けが少ないため、とうぜんながら農業人口はどんどん減り、若いひとたちも農業から離脱して都市へ働きに出た。そして、村から、若者がいなくなった。食糧があふればあふれるほど、苦しくなる一次産業の現実。

こうして、すでに東北農村の疲弊の度合いが増している中で、原子力発電所は建てられた。そして、ついにはその爆発が起きてしまった、ということだ。地震や津波の自然災害ならば、時間の経過とともに田畑も海も回復してゆく、けれども、放射能汚染の被害はそうはいかない。

「たべずには生きてゆけない」。

やはり、そう書いたのは、吉野せいだ。せいは、一八九九年に福島県の小名浜というところで生まれた。日本の近代化のまっ

ただ中に生きた女流作家だ。若いころから文才を買われながら、けつきよく彼女の残した作品は、亡くなる三年前に出版された随想集『涙をたらした神』一冊だけだった。開墾をしながらこどもを育てた母でもあった。

生きることをあきらめなければ、土に落とした種はやがて芽をだし、自然が生かしてくれる。「農業の乏しいけれども食物を支えられる生活のちいさな平和」の中で、せいが見いだした哲学とは、「生まれるのちは生きられるだけ生きたい」という、生きものの本質的な欲求だった（以上引用はすべて「私は百姓女」より）。太古の人々は、狩猟生活の中で食いつめたのだろう、かれらはその苦しみの中で、工夫をくり返し農耕をはじめたのだろうとも彼女は綴った。

農業や漁業といった生業を支える思考は、生きることのかなり根源的な部分の中で成立している。一次産業というのは、食べることと生きることがシンプルにつながっている。

②けれども、そうしたシンプルな価値観は、市場での競争をその原理とする近代資本主義とは相容れない部分がある。五穀豊穡を祈ってコメや野菜、魚が大収穫になれば、むかしは素直に喜ぶことができたし、さんざん書いたように、飢饉のときは壮絶だ。自然は均質化された商品をタイミングよく生みだせるものではない。とうぜん、近代の市場原理は、そんなものを許さない。しかも、たとえ収穫が多くても、それが市場の需要と供給のバランスを失えば、豊作でも貧乏になる。そして、だからこそ、農業や漁業の一次産業は、やがて行きづまっていったのだろう。結果、スーパーマーケットに食料があふればあふれるほど、わたしたちは、一次産業そのものに無関心になっていった。食べものが少ない時代には、あれほど、みんなコメにも魚にも執着していたのに。

だけど、もういちど、みんなに考えてほしい。わたしたちが、いま、ここで生きるためにほんとうに必要なものって、何だろう。

安藤昌益の考えたことを思い出してみよう。汚染された土や海は、ひよつとすると、わたしたちのからだの一部なのではなかったのか。傷つけられた土や海の「痛み」を、わたしたちは、ほんとうに感じられているだろうか。まったく鈍感になつてはいないだろうか。

放射能汚染の不安が日本社会を覆いはじめたとき、わたしがいちばんはじめに感じた違和感は、いま起きている土と海の汚染が、自分のからだの一部で起こっている、ということ誰にも語らないことだった。遠くの災いみたいに話をしている。人間は

食べなくては生きてゆけない。当たり前のことなのに、どこかでやり過ぎせる、と考えているのかもしれない。だけど、いま生きているひとたちは、たぶん一生、この国で生きている限り、この汚染と向き合うことになるだろう。これから生まれるひとたちも、生まれながらにそれを背負いこんでしまうことになるだろう。

ああ好い雨だったと眼を細める。私たちの胸の底では、さあさいこの一踏張りだ。みごと育っておくれと念願しながら、早くも土に浸み込んだ充分の雨水をのんで、自分自身が福々しくいにもふくれ上がっている。

(吉野せい「いもどろぼう」より)

自分のからだは土にも海にも、そしてコメにも、いもにもなりうるという感覚が、わたしたちには、ない。田畑を耕す農家や、海を相手にする漁師には、その感覚があるのだと思う。この放射能汚染の中で、どんなに苦しい気持ちの中に身をさらしているのだろうか。

都市と近代社会の中でつくられた多くのわたしたちのからだは、もっぱら、人間どうしの間でのみ傷ついたり、病んだりする。身体感覚を「取り戻せ」なんていわないけれど、自分のからだとながつているはずの世界のことを想像してみることは大事なことだろう。それは人間どうしだけではなくて、穀物や野菜や魚との間にもあるのだということを。

(山内明美『こども東北学』)

問一 ―線部①「稲作農家が抱えている現実もじつはそうとうに、過酷だ」とありますが、過酷な現実とはどのようなものですか。四十文字以内で説明しなさい。

問二 ―線部②「そうしたシンプルな価値観は、相容れない部分がある」とありますが、「むかし」と「いま」では、「米の豊作」に対する受け止め方はどのようにちがいますか。「シンプルな価値観」を明らかにして説明しなさい。

問三 ※の部分で取り上げられている、3・11以降の日本が直面する問題にふれながら、筆者の考えを百字以内で説明しなさい。

三

次の各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) ケイテキを鳴らして注意する。
- (2) 荷物のメカタを量る。
- (3) ケイトウ的な学習が必要だ。
- (4) 問題点をレッキヨする。
- (5) 潮のカンマンの差がはげしい。

入学試験一次 国語 解答用紙

受験番号
氏名
得点

このらんには
何も書かないこと

問一	問二	問三	問四	問五	問一	問二	問三	問四	問五																														
問一	問二	問三	問四	問五	問一	問二	問三	問四	問五																														
										問一	問二	問三	問四	問五	問一	問二	問三	問四	問五																				
																				問一	問二	問三	問四	問五	問一	問二	問三	問四	問五										
																														問一	問二	問三	問四	問五	問一	問二	問三	問四	問五